

# マーカス・ガーヴィーの初期における軌跡

## ——ジャマイカから「ブラック・アトランティック」へ——

荒木圭子\*

### 1. はじめに

マーカス・ガーヴィーは、第一次世界大戦期のアメリカ合衆国において、初の黒人大衆運動を起こした指導者である。1917年、ニューヨークに万国黒人地位向上協会（Universal Negro Improvement Association: UNIA）を設立してから1925年に国外追放されるまで、アメリカにおける活動期間は決して長いものではなかったが、この間に運動は多数の支持者を得て全米各地に広まり、総計800を超える UNIA 支部が設置されるに至った。

ガーヴィーはアメリカを基盤としながらも、世界各地の人種問題を国際的に解決しようとした。欧米を中心とする国際社会で、「黒人」が人種的に劣等であることが信じ込まれていたなか、ガーヴィーは、黒人の社会的地位と植民地化されているアフリカの状況とを結びつけ、前者の向上のためにはアフリカの独立および発展が不可欠だとするパン・アフリカニズムの思想に基づく運動を展開したのである。

ジャマイカ出身のガーヴィーは、大西洋地域内を移動する中で、あらゆる「黒人」が共通に経験している不平等を目の当たりにし、パン・アフリカニズムの思想を身につけた。その思想は、第一次世界大戦期のアメリカ合衆国において、普遍的な言葉と論理を付与された。ガーヴィーは、当時のアメリカで声高に叫ばれていた民族自決や民主主義といった理念からかけ離れた実態を指摘し、これらの理念の真の実現と黒人解放とを結びつけて、自らの主張を先鋭化していったのである。

本稿では、ガーヴィーによる国際的な黒人大衆運動がどのような論理のもとに形成されていたのか、ガーヴィー自身の大西洋地域における移動と第一次世界大戦前後のアメリカ合衆国という時代状況のなかで明らかにしたい。

---

提出日2016年9月22日 受理日2016年11月23日

\*教養学部国際学科准教授

## 1 ジャマイカから「ブラック・アトランティック」へ

ガーヴィーは1887年8月17日、ジャマイカのセント・アンズ・ベイ（St. Anns Bay）で生まれた。誕生時につけられた名前はマルカス・モザイア・ガーヴィー（Malcus Mosiah Garvey）で、幼少時はモザイアと呼ばれることが多かったようである。改名した時期や動機については明らかでないが、1910年にはマーカス・ガーヴィー（Marcus Garvey）と名乗っている<sup>1)</sup>。ガーヴィーは11人兄弟の末っ子であったが、成人まで生き残ったのはマーカスと姉のインディアナだけであった。

石工であった父マルカス・ガーヴィー（Malchus Garvey）は、読書家であり、地元で弁護士のような役割も果たしていたという。マルカスは、マルーンの末裔ともいわれ、ガーヴィー曰く、「厳格かつ堅固で、決然としており、大胆で強い」人物であったという<sup>2)</sup>。一方、母親のサラ・ガーヴィー（Sarah Garvey）は、父親とは正反対の性格で、「真面目で良心的なクリスチャンであり、・・・敵に対しても慈悲を施そうとする」人物であった<sup>3)</sup>。ガーヴィーは3歳のときにメソヂスト教会で洗礼を受けている<sup>4)</sup>。

ガーヴィーは幼い頃から読書に親しんでいたが、家に蔵書を有するのは、当時のジャマイカ黒人家庭では珍しいことであった。幼少期の遊び相手には、隣に住む白人牧師の娘がいたが、14歳のときに最初の人種の壁を経験する。この少女がスコットランドの学校に入学することになったのを機に、少女の両親は、今後ガーヴィーとは連絡を取らないよう、少女に告げたのである。ガーヴィーが黒人であるためであった。ガーヴィーはこのとき「人間性になんらかの相違があり、分離された別々の社会生活を有する異なる人種が存在することを初めて見いだした」という<sup>5)</sup>。

ガーヴィーは印刷所で見習いとして働き始めるが、この頃の正確な年代については特定されていない。ロバート・A・ヒル（Robert A. Hill）による史料編纂プロジェクトの年表にしたがえば、だいたい14歳のときに名付け親であるアルフレッド・バロウズ（Alfred E. Burrowes）のもとで見習いを始めたことになっている。16歳の頃には財政的理由から学校を辞め、バロウズの会社で植字工となった。翌年には、セント・アン教区の東に隣接するセント・メアリー教区ポート・マリアに開店したバロウズの印刷所の支店で働き始めた。19歳となる1906年、首都キングストンに移り、当時ジャマイカ有数の大企業であったP.A. ベンジャミン製造会社（P.A. Benjamin Manufacturing Company）の印刷所主任となった<sup>6)</sup>。

1907年にキングストンで大地震が発生すると、労働者はますます困窮した生活を送るようになった。翌年、ガーヴィーの勤める印刷所の印刷工組合は、ガーヴィーを指導者に抜擢し、賃上げを要求してストライキを行った。会社側はガーヴィーに対し、昇給を提示してスト指導者の地位を辞めるよう求めたが、ガーヴィーはこれを拒否した。最終的に会社側が新型機械と外国人労働者を導入したためストライキは失敗し、管理職の中でただ一人ストライキに参加していたガーヴィーは解雇された<sup>7)</sup>。

ほどなくしてガーヴィーは政府の印刷所に職を得るが、次第に政治活動を積極化させていく。

急進主義の活動家ロバート・ラヴ (Robert Love) に雄弁術を習い、各地の弁論大会に出場した。ラヴは医師でもあり、週刊紙『ジャマイカ・アドヴォケーター (*Jamaica Advocate*)』を発行するジャーナリストでもあった。同紙はジャマイカだけでなく西インド諸島内に流通し、パン・アフリカニズム的な立場を示しつつ、黒人の待遇改善を訴えていた。ガーヴィーはラヴを指導者として崇めていたという<sup>8)</sup>。

ガーヴィーは、黒人労働者の処遇改善に生活を捧げる決心をし、1910年からは資金集めのために中米各地のプランテーションや印刷所で働いた。最初に訪れたコスタリカでは、ユナイテッド・フルーツ社のバナナ農園で作業時間係となり、続いてパナマ、エクアドル、ニカラグア、ホンジュラス、コロンビア、ヴェネズエラへと旅した。新聞編集活動も続け、コスタリカではバイリンガルの『ラ・ナショナル (*La Nacionale*)』を、パナマでは『ラ・プレンサ (*La Prensa*)』を発行した。

この頃、ガーヴィーは、各地の黒人労働者が置かれている過酷な労働環境を目の当たりにし、あることに気付いたという。それは、どの土地にあっても、社会の底辺で苦しんでいるのは黒人であるという事実であった。

西インド諸島出身の労働者が大半を占めていたパナマ運河建設事業では、ひと月に75ドル以上の報酬を得る「金貨従業員 (Gold Employee)」とそれ以下の「銀貨従業員 (Silver Employee)」に分けられ、前者はアメリカ合衆国やヨーロッパからの白人にほぼ限られていた<sup>9)</sup>。また、プランテーションなどでの管理職についていたのは、全て白人もしくは肌の色の薄い「混血」のカラード (colored) であった。

ガーヴィーは約1年後にジャマイカに戻ったが、1912年、今度はイギリスに渡った。その経緯について、のちに以下のように述べている。

私は自国の政治に興味を持ち始めました。そして、黒人 (black) であるからという理由で、私の人種に対し不正義が行われていることを目にし、不満を持つようになったのです。ほかの場所でも同じかどうか確かめるために中南米や西インド諸島を旅しましたが、同様でした。私は、状況が異なっているかどうかと思い、ヨーロッパに旅立ちました。そして再び、「お前は黒人 (black) だ」という障害物を見いだしたのです<sup>10)</sup>。

イギリスでは、姉のインディアナが保育士として働いており、ガーヴィーの滞在中、援助を続けた<sup>11)</sup>。ガーヴィーは、労働者のための教育機関であったバークベック大学 (Birkbeck College) に2年間在籍し、主に法律を学んだという。また1914年からは、エジプト人ナショナリストのドゥーセ・モハメド・アリ (Duse Mohammed Ali) が発行していた月刊誌『アフリカン・タイムズ・アンド・オリエント・リビュー (*African Times and Orient Review*)』: 以下 *ATOR*』で働いた。同誌は、国際的見地から人種問題を考察しており、英国植民地出身の黒人知識人たちが多数関わっていた<sup>12)</sup>。

ロンドン滞在中、ガーヴィーは *ATOR* 誌での仕事などを通じて、西インド諸島のみならず、アフリカ出身の黒人たちとも知り合った。パン・アフリカニズムやアフリカのナショナリズム

を訴えるかれらとの交流を通して、その後の運動の軸となる人種の見解や運動組織に関する考え方を身につけたという<sup>13)</sup>。

ガーヴィーは、ロンドンのハイド・パークで演説するようになった。この頃、アメリカ黒人のブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington) による『奴隷より身を起こして (*Up from Slavery*)』を読んだこととヨーロッパを旅したことをきっかけに、人種の指導者となる運命に身を捧げる決心をしたという。1923年、ガーヴィーは当時のことを振り返り、以下のように述べている。

私は問いかけました。「黒人の政府はどこにあるのか?」「黒人の王とその王国はどこにあるのか?」・・・私はそれらを見つけることができませんでした。そして宣言したのです。「私がそれらを作り出す助けとなろう」と<sup>14)</sup>。

ガーヴィーが具体的な運動として「黒人国家」建設を目指し始めるのは第一世界大戦終結後であることから、「私がそれらを作り出す助けとなろう」という言葉は、1923年の執筆当時、自らの過去を再解釈した言葉として理解されるべきであろう。しかしながら、あらゆる場所において黒人が不当な立場に置かれていることを目の当たりにしたガーヴィーは、黒人の地位向上のためには、すべての黒人が団結し、全体としての向上を実現させなければならないというパン・アフリカニズム的な確信を得た。

ポール・ギルロイは著書『ブラック・アトランティック (*Black Atlantic*)』において、大西洋地域一帯に国家の枠組みを超える黒人独自の世界が広がっており、その中で繰り広げられてきた人・知識・モノの移動と出会いによって黒人独自の文化が生み出されていることを明らかにしたが、ガーヴィーの思想は、まさにギルロイのいう「ブラック・アトランティック」で培われたといえよう<sup>15)</sup>。

このような信念をもとに、ガーヴィーは母国ジャマイカに戻り、黒人の地位解放運動を組織することになる。

## 2 ジャマイカにおける運動の開始

英国からジャマイカに帰国したガーヴィーは、1914年8月に「万国黒人向上保護協会－アフリカ共同体連盟 (Universal Negro Improvement and Conservation Association and African Communities' League: UNIA-ACL)」を設立した。

この組織名は、イギリスから帰国する船上で生まれた。南アフリカのバストランド出身の妻を伴って帰国する西インド諸島人から、植民地化された生活のなかで「黒人」が経験する恐怖について聞いた夜、寝転がって思案していたところ、この名称が浮かんだのだという<sup>16)</sup>。このエピソードは、ガーヴィーの運動組織が文字通り「ブラック・アトランティック」における移動と出会いのなかで誕生したことを象徴している。

UNIA は、保護 (Conservation) の部分が省略された「万国黒人向上協会 (Universal Negro

Improvement Association)」として記載されることが多く、1915年半ばには UNIA として定着したようである。UNIA と ACL は実質上同一組織であり、まとめて UNIA と表されていたが、UNIA が会員制の友愛団体的なものであったのに対して、ACL はプロパガンダ的な要素を含み、商業など対外的な活動を行う、といった異なる役割が想定されていた<sup>17)</sup>。

UNIA 設立時に発表された一般目標とジャマイカでの地域目標は、以下の通りである<sup>18)</sup>。

#### 一般目標

1. [黒] 人種の間に、普遍的な友愛組合を設立すること
2. 人種の誇りと敬愛の精神を促進すること
3. [黒] 人種のうち墮落した者を更生させること
4. 貧困者へ援助を与えること
5. アフリカの遅れた部族を文明化する手助けをすること
6. アフリカの独立国家の帝国主義を強化すること
7. 国籍に関わらず、すべての黒人を保護するために、世界の主要国家に弁務官事務所もしくは機関を設置すること
8. アフリカの原住民の間に良心的なキリスト教崇拜を奨励すること
9. [黒] 人種の少年少女たちの将来的教育および文化のために総合大学、単科大学、中等学校を設立すること
10. 世界的な商業・産業的交渉を行うこと

#### 地域（ジャマイカ）の目標

11. われわれの少年少女たちのさらなる教育および文化のために、教育的・産業的単科大学を設立すること
12. 墮落した者（とくに犯罪者階級）を更生させ、よい市民になることを助けること
13. 貧困者に施しを与え援助すること
14. 商業・産業への指向性を促進すること
15. 人種間（among the races）の友愛と統一の絆を強化し、普遍的な友愛組合を奨励すること
16. 国の発展を広く助けること<sup>19)</sup>

当初、ガーヴィーは UNIA を政治的なものではなく、友愛組織的なものとして位置づけていた<sup>20)</sup>。それは、ヒルも指摘するように、とくに一般目標の前半にみられる。一方、ヒルによれば、第6項以降には、「アフリカ共同体連盟（ACL）」の「帝国主義的」な傾向が現れており、イギリス帝国の恒久的な統一を目指して1884年から87年まで組織されていた帝国連合連盟（Imperial Federation League）の影響がみられるという<sup>21)</sup>。

ジャマイカ出身のイギリス臣民であったガーヴィーにとって、イギリス帝国は、国家の枠組みを超えた黒人のあり方を考える上でのモデルであった。第6項では、アフリカにある独立国

家が、イギリス本国のように、「黒人帝国」の中核となって「黒人」を統一する、ということが理想化されている。

ガーヴィーの理想とする「帝国」は、必ずしも本国による侵略や搾取を意味するものではなく、むしろ第7項で規定されているように、本国がその臣民的な立場となる「黒人」に対して保護を与えることが想定されていた。

一方で、「アフリカの遅れた部族を文明化する手助け」をし（第5項）、「アフリカ原住民」に対して「キリスト教崇拝を奨励」する（第8項）という記述は、ヨーロッパ人のアフリカ人への眼差しと変わらない。ヨーロッパ諸国は「野蛮で停滞した暗黒の地アフリカ」を文明化するのが「白人の責務」だとして、その植民地支配を正当化したが、ガーヴィーはこのようなヨーロッパ的価値観を共有していた。

ガーヴィーは、一部のエリートを除いて、ジャマイカの黒人の多くは「文明化」されておらず、「卑しむべき」状態にあると認識していた。ここでいう「文明化」とは、ヨーロッパの生活様式や価値基準への同化であった。当時ジャマイカを植民地として支配していたイギリス人を「人類において最も教養があり文明化された人々」とし、黒人大衆もかれらの文明や教養を身につけることで、かれらが受けるのと同じ尊敬を勝ち取ることができるというのであった<sup>22)</sup>。

ガーヴィーは人種の向上のためには、一部の特権階級を作るのではなく、下層階級の引き上げが必要だと考えた。「この協会を設立したのは、あなたがたや私が個人的な向上を必要としているからではありません。わたしたちのように幸運ではない黒人の兄弟姉妹が向上を必要としているからです」というように、ガーヴィーは、「進んだ」黒人としての立場から、同じく「進んだ」黒人たちに対し、「遅れた」大衆を救済することで、黒人が集団として尊敬を勝ち取らなければならないと訴えた<sup>23)</sup>。

しかしながら、ガーヴィーによれば、ジャマイカにおいて黒人大衆の向上を阻んでいるのは、白人ではなく、「進んだ」黒人すなわち白人と黒人大衆の間に位置する「カラード」と一部エリート黒人であった。ガーヴィー曰く、彼らは「黒人」としてのアイデンティティをもたず、一般黒人大衆の苦境に対しても無関心であった。「黒人の現状に対する責任は、文明化された帝国主義を促進しなかった〔指導的地位にある〕黒人達の、冷淡な無関心と不誠実に帰すことができるのです」と述べるガーヴィーにとって、彼らの黒人大衆への態度こそが黒人の向上を阻んでいる元凶なのであった<sup>24)</sup>。

一方、ジャマイカの黒人大衆に関しては、アメリカ黒人にみられるような「黒人意識」が十分に醸成されておらず、「奴隷制廃止以来、眠った状態」にあると指摘している。ガーヴィーは米国の黒人とジャマイカの黒人とを比較して以下のように述べている。

ジャマイカには剥き出しの人種偏見が存在しません。リンチなどのすさまじい事件がないために、黒人と白人が対極に位置していないのです。……黒人は人種的思考を持たず、……かつての主人である白人の習慣や理想から離れて考えることができません。アメリカ黒人と異なり、ジャマイカ（黒）人は総体的な発展を遂げる代わりに、その多くが農奴となり、そしてごく一握りが紳士となるのです<sup>25)</sup>。

ガーヴィーは、エリートである「カラード」も、既存の社会秩序の中で不利益を被っているという点において「黒人」と同様であり、運命共同体であると訴えた。そして「アフリカの血が一滴でも入っていれば、黒人である」という「確立された公理」が国際秩序を支配しているとして、UNIA のモットー「ひとつの神、ひとつの目標、ひとつの運命 (One God, One Aim, One Destiny)」の下、「カラード」を含めたすべての黒人が人種の誇りに目覚めてその向上に尽くすよう求めた<sup>26)</sup>。周知のように、このような「血の一滴」ルールは、米国で一般化されているものであった。

地域目標の第11項には、教育的・産業的単科大学について記されているが、ここには、当時のアメリカにおける黒人教育のあり方をめぐる二つの路線が現れている。当時、アメリカでは職業教育によって黒人の自己改善を進めようとするブッカー・T・ワシントンと、少数のエリート黒人の主導によって人種の向上を目指す W. E. B. デュボイス (W. E. B. DuBois) が黒人指導者としての双壁をなしていた。ガーヴィーは、ジャマイカにおける黒人に対しては、双方の立場とも有効だとして、産業と知性の両面での黒人運動を展開していくべきだとした<sup>27)</sup>。

この時期のガーヴィーは、英領であったジャマイカにおいて、政府に承認を受けた上で活動しようとしていた。UNIA 集会にはキングストンの知事が招かれ、他の政府有力者も UNIA の活動に理解を示していた。ガーヴィーは植民地体制や白人の人種主義に対する批判を行わず、むしろ白人は「最も誠実な友人」であり、ジャマイカには人種対立がないとまで言い切っている<sup>28)</sup>。

地域目標の第15項に見られるように、ガーヴィーは平等な社会における人種間の協調を説いた。ガーヴィーは以下のように述べている。

私は、黒人と白人の間を分裂させようとしているのではありません。「黒人と白人」すべてが平和的に協調し、平等の権利と機会をもちながら居住する国に、ジャマイカがなることを望みます<sup>29)</sup>。

第一次世界大戦が勃発すると、ガーヴィーは「ヨーロッパとアフリカの『共通の敵』、すなわち平和とさらなる文明に対する敵へのイギリス軍の勝利」を願い、イギリス臣民として英国、英国王、英国人に対する忠誠を表明した<sup>30)</sup>。しかしながら、同時期にブッカー・T・ワシントンへ送った手紙の中で、英領西インド諸島における人種偏見の克服のために対峙すべき相手として、「偽善的な白人 (それにも関わらずわれわれの友人であるのですが)」と述べているように、白人に対する複雑な心境も窺える<sup>31)</sup>。

ガーヴィーは、ジャマイカにおける黒人大衆の救済のため、ワシントンのタスキーギ校 (Tuskegee Institute) にならった産業農園および学校を建設することを計画し、資金集めのため渡米することを決意した。ガーヴィーは UNIA 設立直後から、ワシントンと書簡のやり取りをしていたが、ワシントンはガーヴィーの渡米計画を喜び、滞米中は出来る限りの援助を与えることを約束した<sup>32)</sup>。しかし、渡米の日程が遅れ、実際にガーヴィーがニューヨークに到着したのはワシントンの死後4ヶ月ほど経った1916年3月であった<sup>33)</sup>。

### 3 米国における運動の開花

1916年5月9日、ガーヴィーはニューヨーク市ハーレムのセント・マークス教会で渡米後初の演説を行った<sup>34)</sup>。これを手配したのは、社会主義を掲げる黒人青年指導者フィリップ・ランドルフ (A. Philip Randolph) であった。36人ほどの観衆の前で、緊張した面持ちのガーヴィーは、演説前にフロアを行ったり来たりしていたという。その後、「ポプラの葉のように揺れながら、震えた声で演説を始めた」ものの、しばらくすると聴衆から口笛や野次が飛びはじめた。喧噪の中、ガーヴィーは演説を続けようと努めたが、突然前後に身体を揺らしはじめ、3フィートの高さのステージから落下してしまった。のちのガーヴィーの説明によれば、動揺して気を失ってしまったのであった<sup>35)</sup>。

初めての演説は無残な結果に終わったものの、ガーヴィーは、当初の予定であった5ヶ月の滞在期間を大幅に延長し、約1年間かけて38州を遊説して回った<sup>36)</sup>。この頃の詳細については明らかでないが、1917年5月にニューヨークに戻り、ハーレムにUNIA ニューヨーク支部を設立した。

当時のアメリカは、第一次世界大戦の影響で債務国から債権国へと立場を転換させ、戦争特需で産業が大きく発展していた。金融市場の中心地もロンドンからニューヨークに移り、経済的に疲弊したヨーロッパに代わってアメリカが一大強国として台頭するようになっていた。

大戦の影響でヨーロッパからの移民が減少するなか、北部産業都市では労働力が不足し、黒人による南部からの「大移動 (Great Migration)」が顕著に見られるようになった。黒人の大量流入は、北部都市における白人労働者との軋轢を生み、各地で人種暴動を引き起こした<sup>37)</sup>。

1917年7月にイリノイ州のイースト・セントルイスで起こった暴動は特に大規模で、少なくとも黒人39名、白人8名の死者に加えて、多数の負傷者を出した<sup>38)</sup>。また1919年夏は24もの町で人種暴動が発生し、「赤い夏 (Red Summer)」と呼ばれた。1915年にはクー・クラックス・クラン (Ku Klux Klan) が再結成され、黒人の増加した北部都市部にも活動を拡大させたほか、南部各地では公然と黒人に対するリンチを行っていた。

このようななか、ハーレムを中心に、「ニュー・ニグロ (New Negro)」と呼ばれる新しい黒人の潮流が見られるようになった。従順で隷属的といった「白人からのステレオタイプに当てはまる黒人像」を「オールド・ニグロ (Old Negro)」として拒絶し、白人からの攻撃に対し自衛のため抵抗することも辞さない、自尊心と自立心に基づく新しい心理状態の黒人像が出現したのである<sup>39)</sup>。

ニュー・ニグロが登場した背景には、上述の「大移動」により南部から北部都市に移住した黒人が、新たな環境における新たな人種差別に対応する必要があったこと、そして第一次世界大戦に従軍した黒人兵士が、フランスにおいて人種的に寛大な待遇を受けたことで自尊心と自意識を高め、母国人による変わらぬ人種差別に、異議を唱え始めたことなどが挙げられる。

1920年の第1回 UNIA 国際大会中に行われた UNIA のパレードの写真にも、「ニュー・ニグロは恐れを知らない (THE NEW NEGRO HAS NO FEAR)」と書かれたプラカードが参加者に



"UNIA Parade, organized in Harlem, 1920," New York Public Library Digital Collections.

によって掲げられているのが確認できる<sup>40)</sup>。

そもそもアメリカにおいて、黒人は長い抵抗の歴史を有していた。ガーヴィーは、奴隷解放以来のアメリカ黒人の発展を評価し、これを高い黒人意識の賜物であるとした。この意識の高さは、南部における差別のおかげだとして、それに感謝しなければならないと述べたことさえある。一方、奴隷解放以来、眠った状態にあるジャマイカの黒人の中からフレデリック・ダグラスやブッカー・T・ワシントンが生み出されることはなく、彼らのような指導者をもつアメリカの黒人は、全世界における黒人のなかで最も進んでいるというのであった<sup>41)</sup>。

イースト・セントルイスでの人種暴動をきっかけに、ガーヴィーはニューヨークを拠点とする黒人指導者たちの組織した反リンチ運動に参加するようになる<sup>42)</sup>。ATOR 誌のアメリカ特派員を務めていたジョン・E・ブルース (John E. Bruce) が、ニューヨークの黒人有力者をガーヴィーに紹介するなどして手助けをしていた<sup>43)</sup>。

当時のハーレムで活動していた黒人指導者たちの中でも、ヒューバート・ハリソン (Hubert Harrison) は、この時期のガーヴィーに多大な影響を与えたといわれる<sup>44)</sup>。ハリソンは、前述のニュー・ニグロ運動を始めたことでも知られ、「ハーレム急進主義の父」、「ブラック・ソクラテス」などと呼ばれていた。上述のブルースの弟子でもあり、1911年から社会党員として活動していたが、党内の人種差別を問題視し、「階級」よりも「人種」を第一に考える立場をとるようになっていた。

ハリソンは1917年夏、黒人自由連盟 (Liberty League of Negro-Americans) を設立した。同連盟は、リンチを連邦犯罪とすることと黒人に参政権を付与することの二点を訴え、議会への

嘆願も行った。当時、第一次世界大戦に参戦するにあたって、ウィルソン大統領は「民主主義を守るための戦い」というレトリックを高らかに繰り返していたが、黒人自由連盟は、アメリカ国内において民主主義を実現させることを要求していた<sup>45)</sup>。

ハリソンは、アメリカ国内における黒人の待遇改善を主眼としていたものの、他国の有色人種との協力や、アフリカにおける将来的な民主主義の実現すなわちアフリカの独立をも視野に入れていた点で、パン・アフリカニズム的観点を持っていた。アメリカ黒人は、国内の黒人および海外の有色人種との「二元的な関係」を有しているとして、黒、茶、黄の3色旗をその象徴としたが、これはのちにガーヴィーが制定した赤、黒、緑の3色旗に影響を与えたと言われている。

ガーヴィーはハーレムを中心にさまざまな集会で演説を行うようになり、次第に知名度を上げていった。その一方、1917年秋から翌年初頭にかけて、UNIA ニューヨーク支部は2度の内部分裂を繰り返し、不安定な状態に陥った。ガーヴィーは当初、資金集めの後ジャマイカに帰国する意向であったが、ニューヨーク支部の分裂後、支持者から支部長になるように請われ、米国にとどまる決心をした<sup>46)</sup>。

1918年5月にニューヨーク支部は本部として再編され、その2ヶ月後にUNIAは非営利法人としてニューヨーク州で登録された<sup>47)</sup>。UNIAの設立目的は、規約の第1条第3項に述べられているが、ジャマイカで設定されたものから若干の変化を見せている。

1. [黒]人種の間に、普遍的な友愛組合を設立すること
2. 誇りと敬愛の精神を促進すること
3. 墮落した者を更生させること
4. 貧困者へ援助を与えること
5. アフリカの遅れた部族を文明化する手助けをすること
6. 独立黒人国家および共同体 (Independent Negro Nations and Communities) の発展に助力すること
7. 国籍に関わらず、すべての黒人を保護・代表するために、世界の主要国家及び都市に弁務官事務所もしくは機関を設置すること
8. アフリカの原住民の間に良心的な宗教 (Spiritual) 崇拝を奨励すること
9. 人々の人種的教育および教養のために総合大学、単科大学、学士院、学校を設立すること
10. 人々の利益のため、世界的な商業・産業的交渉を行うこと
11. すべての黒人コミュニティの状況改善のために働くこと<sup>48)</sup>

まず注目すべきは、1914年にジャマイカで制定された目的のなかにみられた「アフリカの独立国家の帝国主義 (imperialism) を強化すること」という文言から「帝国主義」という言葉が取り下げられ、「独立黒人国家および共同体の発展に助力すること」(第6項)に変更されていることである。この理由として、第一次世界大戦が終焉を迎えようとしていた時代背景が指

摘されよう。国民国家および民族自決の原則が公式化され、国際社会の基本的構造が帝国主義体制から民主主義体制へ移行しつつあったなか、後述するように、ガーヴィーの使用する言語も徐々に変化していったのである。

ただし、ガーヴィー自身は、その後も演説の中ではしばしば、来るべき「黒人国家」に対して帝国（empire）という言葉を用いていることから、国家の枠組みを超えた帝國的な「黒人国家」像自体に大きな変化は見られなかったといっていよう。

また、1914年においては「アフリカの原住民の間に良心的なキリスト教崇拝を奨励すること」が目的とされたが、1918年には「キリスト教」が「宗教」に改められている（第8項）。ここからは、運動がより多様な黒人を内包する規模へ拡大したことが窺える。実際、UNIAの活動には、ユダヤ教、ヒンズー教、イスラム教あるいはカトリックなどといった、さまざまな宗教・宗派の人々が参加していた。たとえば1922年のUNIA国際大会におけるパレードでは、黒人ユダヤ教徒300名ほどが隊列を組んで行進したという<sup>49)</sup>。

UNIA会員資格は「黒人の血統とアフリカの出自をもつ」すべての人に開かれており、7名以上の会員によって支部を設立できることができた<sup>50)</sup>。会員は上限25セントの月会費を納入し、各支部は毎月末、収入の5分の1を本部に送金することとされた<sup>51)</sup>。UNIAの活動は次第に全国に広まり、UCLAの史料編纂プロジェクトの確認によれば、アメリカ国内における支部は総計838を数えるほどであった<sup>52)</sup>。

一方、「アフリカ共同体連盟（ACL）」は、資本金1万ドルの営利法人として登録された<sup>53)</sup>。コミュニティ発展のための経済プログラムを具体的に実行する機関として、食料雑貨店、レストランやカフェ、洗濯屋の営業のほか、出版業、衣服や暖房機の製造と販売、動産及び不動産取引、特許申請など、あらゆる事業を行うものとされた。

ACLが行った大きな事業としては、週刊の機関紙『ニグロ・ワールド（Negro World）』の発行がある<sup>54)</sup>。『ニグロ・ワールド』には、各地における黒人や、同様の抵抗運動を繰り広げている他人種・他民族に関する記事のほか、各UNIA支部の活動紹介が掲載され、黒人間およびその他の人々との連帯感を高める役割が期待されていた。1923年から1924年にはフランス語およびスペイン語のページも用意されるようになった。

UNIA各支部では、集会の冒頭で、ガーヴィーの執筆した『ニグロ・ワールド』巻頭記事を読み上げるのが慣例となっていた。ガーヴィー運動の支持者のなかには、購読するための十分な資金をもちあわせていない者、文字の読めない者が少なくなかったためである<sup>55)</sup>。ガーヴィーは以下のように述べている。

もしすべての人の間に統一した感情が存在すべきならば、また、もしすべてのことに関して行動の統一があるべきならば、この感情を造り出す手段がなくてはなりません。そして、今日の世界でその感情を創り出す偉大なる手段とは、新聞なのです<sup>56)</sup>。

ベネディクト・アンダーソンは、出版物の普及が「国民的なものと想像される共同体」の創出に大きく寄与したと論じているが、『ニグロ・ワールド』紙にも同様の役割が期待されてい

たといえよう<sup>57)</sup>。同紙は全米各地のほか、中米、西インド諸島、アフリカ諸国に持ち込まれ、ガーヴィー運動を広める媒体となった。ガーヴィー運動は各地の反植民地運動に影響を与えるようになり、各植民地政府は同紙の購読禁止令を発令するほどであった<sup>58)</sup>。

#### 4 ガーヴィーの理念－政治的独立と経済的自立

運動の基盤をアメリカに移したガーヴィーは、ジャマイカ時代からの主張を、より先鋭化させた。それは政治的独立と経済的自立の二つの軸からなる。以下で、ガーヴィーがどのようなレトリックを使ってそれぞれの主張を行ったのか、見ていきたい。

##### (1) 政治的独立

第一次世界大戦期のアメリカにおいては、自由 (liberty) や民主主義 (democracy) といった理念が、声高に叫ばれていた。しかし、ガーヴィーはじめとする黒人指導者たちは、その理念が黒人たちに適用されていない矛盾に気づいていた。そして、その矛盾を突くことによって、黒人たちは、自分たちの権利要求を正当化することができたのである。ガーヴィーは、以下のように述べている。

我々は今、再編成されつつある世界に住んでいます。民主主義という神聖な大義に命を捧げるため、また全ての人間に自由 (liberty) を与えるため、そして全ての人を解放 (free) するために、世界中の人々が召集された4年半にわたる血なまぐさい戦争から脱して、世界は再編成されつつあるのです。・・・この茶番めいた民主主義のために闘うべく、アメリカ、西インド諸島、アフリカから4年半の間に200万もの黒人男性が連れ出されました。・・・そして今、戦いに勝利した後、我々は、自分たちが民主主義を享受していない事を悟ったのです。ゆえに我々 UNIA は、世界を前にして、民主主義における我々の分け前を要求します。(拍手喝采) ……我々は、民主主義を獲得するまで、闘い続けるでしょう<sup>59)</sup>。

第一次世界大戦は、「何世紀もの間、沈黙を守ってきた階級、民族、人種が自己の権利を主張」するための言葉と論理を提供したといえる。ガーヴィー自身も「アメリカの大統領が・・・人々 (peoples) や民族 (nations) の自決権について語り始めたとき、彼は、人々の鬱積した感情に声と表現方法を与えました」と述べている<sup>60)</sup>。

ダヴ・ローネンが指摘するように、1918年2月、ウィルソン大統領が民族自決権の重要性を主張し始めた当初は、戦後処理のための一手段という認識でしかなく、普遍的に適用しうる基本的イデオロギーという位置付けではなかった<sup>61)</sup>。しかし、“nation”, “nationality (ies)”, “peoples” といった用語の混用に代表されるような「民族自決」概念の曖昧性から、ヨーロッパにおける既存国家からの民族分離独立運動を正当化する概念となっていく。

唐渡晃弘は、『自らの国家』を求める集団は、その集団の『権利』として自決『権』を援用し始め、同時に、『それは民主主義の実現である』という論理を展開し、その主張の正統性を

掲げるようになる」と述べているが、これは、そのままガーヴィーの主張を説明するものとなろう<sup>62)</sup>。

民族国家や自決権が国際社会で正当化されるなか、ガーヴィーは、国際的に受容されている人種序列において黒人の地位を向上させるためには、欧米中心の国際社会に承認される国家を有しなければならないと考えた。そしてその国家がアフリカの外に住む黒人の後ろ盾となることによって、アフリカ外のアフリカ系人の地位向上が達成されると考えたのである。このように、ガーヴィーは「黒人」という人種集団を擬似的な「民族」として捉えた。

あなた方が西インド諸島やアメリカに住んでいるのに、なぜ私はアフリカと言うのでしょうか？ それは、これらの地域においては、あなた方は、内外に保護をもうけない限り、決して安全ではないからです。この国の日本人と中国人は、リンチされることがありません。これは、報復に対する恐れゆえであります。これらの人々の背後には、彼らを守る陸軍や海軍が控えているのです。・・・しかし威厳もなく組織化もされていない民族 (nation) を代表している黒人は、リンチされるのです。・・・4億の黒人に必要なのは、民族的故国 (a national home)、民族的政府 (a national government) なのであります<sup>63)</sup>。

当時のアフリカは、ほとんど全ての地域がヨーロッパ諸国の植民地支配を受けており、かろうじて独立を保っていたエチオピアとリベリアは常にヨーロッパ諸国からの軍事的脅威にさらされ、経済的にも欧米諸国に主導権を握られているのが現状であった。

ガーヴィーは、イギリスから独立を果たしたアメリカを、ヨーロッパの植民地支配から独立すべきアフリカに重ね合わせ、アメリカ建国者の役割をニュー・ニグロに託そうとした。

われわれの前には、ただ一つの目標しかありません。それは自由 (liberty) という目標です。140年以上前、ヴァージニア議会でパトリック・ヘンリーが演説した、あの自由です。われわれアメリカのニュー・ニグロは、自由 (liberty) を望み、しからずんば死を選択すると宣言します<sup>64)</sup>。

またガーヴィーは、ピルグリム・ファザーズが「彼らを庇護する強力な国家を建設するため」に払った努力や犠牲を賞賛し、黒人を鼓舞した<sup>65)</sup>。

行きなさい。そして不毛なアフリカを偉大な国にするのです。アメリカのような偉大な国家が、ピルグリム・ファザーズと初期開拓者の血のにじむような犠牲によるものであるように。今がチャンスなのです<sup>66)</sup>。

ガーヴィーはパトリック・ヘンリーやピルグリム・ファザーズなどイギリスからの独立の立役者を、国家建設という崇高な夢を実現させたとして賞賛する一方で、これら開拓者たちの入植を、侵略行為とは見なさず、かれらが遭遇したネイティブ・アメリカンたちを「野蛮で

粗野な人々、無学の人々」であったとした<sup>67)</sup>。このことは、ガーヴィーが、単にすべての被抑圧民族の独立・解放を理想としていたわけではないことを物語っている。ガーヴィーは、あくまでも当時の国際社会からの承認を得るため、欧米諸国の価値観に基づく「発展」を目指していたのである。そのためには、もうひとつの主張である黒人の経済的自立は不可欠なものであった。

## （２）経済的自立

当時の国際社会の中で、欧米諸国と対等に位置づけられるためには、アフリカに黒人国家を設立するだけでは十分でなかった。それは近代国家である必要があり、発展を遂げていなければならなかった。ガーヴィーにとっての「発展」とは、資本主義の下での産業的・商業的发展にはかならない。「資本主義は世界における発展に不可欠」であり、それに反対する者は、「人類発展の敵」というのであった<sup>68)</sup>。白人は「発展」によって、世界中からの尊敬を得るようになったとガーヴィーは語る。

もし彼らの人種が、発展や達成という業績を有していなかったならば、他の劣等人々と同様に、奴隷制や束縛、偏見によって代価を支払っていたでしょう。古代ブリトン人でさえ、かつては鈍くてローマ人の良質な奴隷にもなれなかったのです……。しかし今日では彼ら（白）人種の威光が世界を支配しているのです<sup>69)</sup>。

ガーヴィーによれば、民族や人種の地位は、その集団の人類文明への貢献度によって決定される<sup>70)</sup>。ゆえに、人種の文明的優劣は時代によって異なるのである。現在の黒人の劣等的地位は、古代以来、かれらが文明に対して貢献をしてこなかったことが原因なのであった。このように、人種の優劣を、それぞれの時代における「文明度」に帰して相対的に捉えるガーヴィーの考え方は、当時主流であった人種の優劣を生物学的資質に結びつける絶対的人種観を否定するものであった。

ガーヴィーは、当時広く流布していた社会進化論における人種の序列のあり方、すなわち黒人の底辺への固定化には反対していたものの、進化論的な考え方は否定せず、むしろそのような生存競争のなかでの黒人の自助努力を訴えた。

〔黒人は〕単なる抗議や要求以上の、何か別のことがなされなければならないことに気づいています。「生存競争」、「適者生存」というダーウィンの言葉の重要性に気づいているのです。そして、経済的に自己を支え、世界の商業及び産業生活の中の一要素となれば、世界における良品をいくつか手に入れられるだけでなく、名声や地位をも獲得できることを知っているのです。これらの理由から、我々は、他の人種に助けを求めることはせず、……自立する努力を始めたのです<sup>71)</sup>。

失業について文句を言うことに何の意味があるのでしょうか？ あなた方は、自らに職を

与えるために、どんな努力を払ったというのでしょうか？ 黒人はいつも、自分すべきことを他人にしてもらおうとしてきました。・・・もし工場で働きたいなら、あなた方は自分たちの工場を建ててそれを維持しなければなりません。もし事務所で働きたいのなら、・・・自分たちの会社を保有しなければなりません。これがすべての人の産業生活を支配している事実であり、黒人も例外ではないのです<sup>72)</sup>。

ガーヴィーによれば、今や「全人種が各々の発展のため自力で進もうと努めている産業の時代」であり、「偉大なる商業的生存競争」の時代である。このような競争社会の中では、弱小な集団に対しては何の慈悲も示されない。世界の黒人に対する列強の搾取を阻止するためには、黒人が集団として経済発展を遂げる必要があるのである<sup>73)</sup>。

### おわりに

ガーヴィーによれば、あらゆる地域において黒人が劣等な地位におとめられているのは、黒人が自らを庇護しうる強大な国家を有しないからであった。ガーヴィーのいう「強大な国家」とは、政治的に独立しているだけでなく、経済的に発展を遂げている国家であった。ガーヴィーは、国際社会において承認される、このような国家の実現のために、すべての黒人たちが団結して努力しなければならないと強く訴えた。

このような思想は、第一次世界大戦期という時期に、ガーヴィー自身がまさに「ブラック・アトランティック」を体現するなかで、形成されていったものである。

本稿でみてきたように、ガーヴィーは、ジャマイカから大西洋地域を巡りながらパン・アフリカニズム的思想を身につけたうえで、第一次世界大戦のさなかに、ヨーロッパに代わって国際社会の一大強国として台頭しつつあったアメリカに渡った。ここで民主主義や民族自決といった新しい普遍的概念と、資本主義競争社会のなかでの自立的な経済発展の必要性への確信を得て、運動を拡大させていったのである。

### 注

- 1) Record of Birth of Malcus Mosiah Garvey, in Robert A. Hill, *The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers* [以下, *Papers*], vol.1, pp.15-16; Report of a Pamphlet by Marcus Garvey, *Jamaica Times Supplement*, May 28, 1910, *ibid.*, p.22
- 2) マルーン (maroon) とは、奴隷制から逃亡し、主に山中で自給自足のコミュニティを築いたアフリカ人を総称したものである。カリブ海諸島において多くみられた。ジャマイカでは18世紀前半、英国軍とのあいだに2度にわたるマルーン戦争が勃発した。
- 3) E. David Cronon, *Black Moses*, pp.5-6; Marcus Garvey, "The Negro's Greatest Enemy," in Amy Jacques Garvey, ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, vol.2 (New York: Atheneum, 1992; 1st published in 1925), p.124
- 4) なお、洗礼記録の名前のスペルは、誕生記録のものとは異なっている。Record of Baptism of Marchus Moziah Garvey, in Hill, *Papers*, vol.1, p.18
- 5) Cronon, *Black Moses*, p.7; Marcus Garvey, "Negro's Greatest Enemy," *Current History*, vol.18, no.6

- (September 1923), p.952.
- 6) クロノンによれば、ガーヴィーは14歳のときに学校を辞め、17歳でキングストンに移った。一方エイミー・ジェイクス・ガーヴィーによれば、15歳のとき印刷所で働き始め、18歳でキングストンに移った。Hill, *Papers*, vol.1, pp.cix-cx; Cronon, *Black Moses*, p.11; Amy Jacques Garvey, *Garvey and Garveyism* (New York: Octagon Books, 1978), p.4; Amy Jacques Garvey, "The Early Years of Marcus Garvey," in John Henrik Clarke, *Marcus Garvey and the Vision of Africa* (New York: Vintage Books, 1974), pp.32-33
  - 7) クロノンによれば、ガーヴィーはこのとき以来、生涯を通じて労働運動の効果に対して懐疑的であったという。Cronon, *Black Moses*, pp.12-13
  - 8) Colin Grant, *Negro with a Hat: The Rise and Fall of Marcus Garvey* (New York: Oxford University Press, 2008), p.22
  - 9) Monroe N. Work, ed., *Negro Year Book: An Annual Encyclopedia of the Negro, 1921-1922* (Alabama: The Negro Year Book Publishing Company, Tuskegee Institute, 1922), p.87; Patrice C. Brown, "The Panama Canal: the African American Experience," *Prologue Magazine*, vol.29, no.2 (Summer 1997), (<http://www.archives.gov/publications/prologue/1997/summer/panama-canal.html>)
  - 10) Marcus Garvey, "Negro's Greatest Enemy," *Current History*, vol.18, no.6 (September 1923); Amy Jacques Garvey, ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, vol.2, p.126
  - 11) Amy Jacques Garvey, "The Early Years of Marcus Garvey," p.35
  - 12) ドゥーセ・モハメド・アリは、1911年にエジプト人によって初めて書かれたエジプト史『ファラオの地で (*In the Land of the Pharaohs*)』を発表した。また同年、第一回万国人種会議 (First Universal Races Congress) を主催し、アメリカのW・E・B・デュボイスや南アフリカのテンゴ・ジャバヴ (Tengo Jabavu) など、のちにパン・アフリカニズムを推進する指導者たちが出席した。アリは1922年にはUNIA幹部となっている。Robert Hill, "The First England Years and After, 1912-1916," in John Henrik Clarke, *Marcus Garvey and the Vision of Africa*, pp. 41-44.
  - 13) ヒルは、とくに影響があった書物として、英領西アフリカ国民会議 (National Congress of British West Africa) のメンバーであった英領ゴールドコーストの弁護士ケイスリー・ヘイフォード (Casely Hayford) の『解放されたエチオピア (*Ethiopia Unbound*)』(1911) とシエラレオネの軍医ジェームズ・アフリカヌス・ビール・ホートン (James Africanus Beale Horton) の『西アフリカの国々と人々、英国と原住民、そしてアフリカ人種の擁護 (*West African Countries and Peoples, British and Natives. And a Vindication of the African Race*)』を挙げ、それぞれ分析している。Hill, "The First England Years and After, 1912-1916," p. 49-59.
  - 14) Marcus Garvey, "Negro's Greatest Enemy," *Current History*, vol.18, no.6 (September 1923), p. 952, also in Amy Jacques Garvey, ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, vol.2, p. 126
  - 15) ポール・ギルロイ (上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳) 『ブラック・アトランティックー近代性と二重意識』(月曜社, 2006年); Paul Gilroy, *Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness* (Cambridge: Harvard University Press, 1995)
  - 16) Marcus Garvey, "Negro's Greatest Enemy," *Current History*, vol.18, no.6 (September 1923), p. 953, also in Amy Jacques Garvey, ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, vol.2, pp. 126-27
  - 17) Hill, *Papers*, vol. 1, pp. lx-lxi
  - 18) UNIAは、「黒人」全体を想定した一般目標を掲げつつ、各コミュニティにはそれぞれ独自の環境があるとの認識から、各地域で独自の目標を設定することができるようにした。*Jamaica Times*, January 16, 1915 in Hill, *Papers*, vol.1, p. 104
  - 19) Hill, *Papers*, vol.1, p. 117
  - 20) *Gleaner*, October 23, 1914, in Hill, *Papers*, vol.1, p. 82;
  - 21) もともとACLは、「アフリカ共同体帝国主義連盟 (African Communities (Imperial) League)」

- という名称であった。General Introduction, Hill, *ibid.*, pp. lix-lx
- 22) *Daily Chronicle*, August 26, 1915 in Hill, *Papers*, vol.1, pp.133-35
- 23) *Daily Chronicle* (Jamaica), March 26, 1915 in Hill, *Papers*, vol.1, pp.115-16
- 24) Pamphlet by Marcus Garvey, July-August, 1914, Hill, *ibid.*, p.55
- 25) An attachment to the letter from Marcus Garvey to R. R. Moton, February 29, 1916 in Hill, *Papers*, vol.1, p. 179
- 26) Marcus Garvey, *A Talk with Afro-West Indians*, A Pamphlet published in July-August 1914 in Hill, *Papers*, vol.1, p. 61.
- 27) Marcus Garvey to Booker T. Washington, September 8, 1914 in Hill, *Papers*, vol. 1, p.67
- 28) Jamaica Times, January 16, 1915 in Hill, *Papers*, vol.1, p.105; *Daily Chronicle* (Jamaica), March 26, 1915 in Hill, *ibid.*, p.115; 例えば, 1914 年末, 貧困者にクリスマスの食事を提供するために開かれた資金集めコンサートには, キングストン知事が後援していた。 *Daily Chronicle*, December 11, 1914, in Hill, *ibid.*, vol.1, p. 100
- 29) An attachment to the letter from Marcus Garvey to R. R. Moton, February 29, 1916 in Hill, *Papers*, vol.1, p.182
- 30) Enclosure, September 16, 1914, in Hill, *Papers*, vol.1, pp.77-78
- 31) Marcus Garvey to Booker T. Washington, September 8, 1914, in Hill, *Papers*, vol.1, p.67
- 32) Booker T. Washington to Marcus Garvey, April 27, 1915 in Hill, *ibid.*, p.118; なお, UNIA Papers に収められているガーヴィーとワシントンの書簡はすべて, オンラインで公開されているイリノイ大学の The Booker T. Washington Papers でも見ることができる。(http://www.historycooperative.org/btw/)。
- 33) 当初は 1915 年 前半に渡米する計画であった。Marcus Garvey to Booker T. Washington, September 8, 1914 in Hill, *Papers*, vol.1, pp. 66-67; Marcus Garvey to Booker T. Washington, April 12, 1915 in Hill, *ibid.*, p. 116;
- 34) ガーヴィーは, 渡米後初の演説の司会をデュボイスに依頼したが, デュボイスは当日の不在を理由にこの申し出を断っていた。Marcus Garvey to W. E. B. DeBois, April 25, 1916 in Hill, *Papers*, vol. 1, p. 187; W. E. B. DuBois's Private Secretary to Marcus Garvey, April 29, 1916 in Hill, *ibid.*, p. 190 ; なお, ガーヴィーは 1915 年 4 月にジャマイカを訪れたデュボイスに対し, 歓迎の意を表する書簡を送っている。Marcus Garvey to W. E. B. DeBois, April 30, 1915 in Hill, *Papers*, vol. 1, p. 120
- 35) Account by W. A. Domingo of Marcus Garvey 's St. Mark's Church Hall Lecture, no date, in Hill, *Papers*, vol.1, pp.190-92
- 36) Marcus Garvey to R. R. Moton, February 29, 1916 in Hill, *Papers*, vol.1, p.178; Printed Address by Marcus Garvey on the East St. Louis Riots, July 8, 1917 in Hill, *ibid.*, p.214; *Pittsburgh Courier*, February 22, 1930 in Hill, *ibid.*, p.224
- 37) Monroe N. Work ed., *Negro Year Book: An Annual Encyclopedia of the Negro*, 1918-1919 (Alabama: The Negro Year Book Publishing Company, Tuskegee Institute, 1919) p.9
- 38) Monroe N. Work ed., *Negro Year Book*, 1918-1919, p.50
- 39) Alain Locke, "The New Negro" in Alain Locke, ed., *The New Negro*, Reprint Edition (New York: Touchstone, 1997) 初版本は 1925 年出版。
- 40) Schomburg Center for Research in Black Culture, Photographs and Prints Division, The New York Public Library. "UNIA Parade, organized in Harlem, 1920" New York Public Library Digital Collections. Accessed September 22, 2016. <http://digitalcollections.nypl.org/items/510d47df-7943-a3d9-e040-e00a18064a99>
- 41) *Champion Magazine*, vol.1 (January 1917) in Hill, *Papers*, vol. 1, pp. 197-99
- 42) タスキーギの調査によれば, 1918 年には 64 ものリンチがあり, 前年より 26 件増加した。この

- うち 60 名が黒人, 4 名が白人であり, 61 件が南部で発生した。( *Negro Year Book*, 1918-1919, p. 69)
- 43) John E. Bruce Papers, B5-14 (also in Hill, *Papers*, vol.1, p.200)
- 44) ハリソンは, 1920 年 1 月から 22 年 9 月まで『ニグロ・ワールド ( *Negro World* )』の編集に携わったが, ガーヴィーが独善的であるとして UNIA の活動から退いた。Hubert Harrison, diary, May 24, 1920 in Jeffrey B. Perry, ed., *A Hubert Harrison Reader* (Middletown, CT: Wesleyan University Press, 2001), pp.189-90; Hubert Harrison, "Marcus Garvey at the Bar of United States," Associated Negro Press, early July 1923 in *ibid.*, pp.194-99; Hill, *Papers*, vol.7, pp.972-73; [http://www.aaregistry.com/african\\_american\\_history/569/Charles\\_Seifert\\_a\\_valuable\\_yet\\_unknown\\_historian](http://www.aaregistry.com/african_american_history/569/Charles_Seifert_a_valuable_yet_unknown_historian).
- 45) "Declaration of Principles" in Jeffrey B. Perry, ed., *A Hubert Harrison Reader*, pp.90-92; "The Liberty League's Petition to the House of Representatives of the United States, July 4, 1917," in *ibid.*, pp. 92-93; Hubert Henry Harrison, *When Africa Awakes* (Baltimore: Black Classic Press, 1997) (first published in 1920), pp.11-13.
- 46) Marcus Garvey, "The Negro's Greatest Enemy," *The Current History*, vol.18, no.6 (September 1923), pp.954-55
- 47) Certificate of Incorporation of the UNIA, July 2, 1918 in Hill, *Papers*, vol. 1, pp. 246-248.
- 48) 規約の中では番号はつけられていないが, ここでは便宜的に番号を付した。Constitution and Book of Laws, July, 1918, in Hill, *Papers*, vol. 1, p. 257
- 49) Vincent, *Black Power and the Garvey Movement*, pp. 116-17
- 50) Constitution and Book of Laws, July, 1918, Hill, *Papers*, vol. 1, p. 256; 1919 年 8 月の集会で, ガーヴィーはハーレム地域における UNIA 会員は 5,500 人ほどであると述べている。また, 1923 年の郵便詐欺罪の裁判時には, UNIA ニューヨーク支部のメンバーは 3 万人であると証言している。UNIA Meeting at Carnegie Hall, August 25, 1919 in Hill, *Papers*, vol.1, p.504; Testimony of Marcus Garvey, June 14, 1923, United States Circuit Court of Appeals for the Second Circuit: Marcus Garvey vs. United States of America, p. 2289
- 51) Constitution and Book of Laws, July, 1918, Hill, *Papers*, vol. 1, pp. 265-66
- 52) 1921 年から 1933 年の間に『ニグロ・ワールド』紙で活動が報告された支部と, UNIA 中央局の記録の中で 1925 ~ 26 年に活動中だと記載されている支部を合わせたものである。Hill, *Papers*, 7, pp. 986-996
- 53) Certificate of Incorporation of the ACL, July 1, 1918 in Hill, *Papers*, vol. 1, pp. 248-255.
- 54) 当初, ACL は UNIA ニューヨーク支部が唯一の株主として運営していた。のちに『ニグロ・ワールド』営業権は UNIA 本部に 4 万 6,000 ドルで売却されることになったが, 実際に金銭の授受はなかったという。Statement of Elie Garcia, January 13, 1922, FBI File, RG61 (Hill, *Papers*, vol. 4, p. 402); Statement of Cap. J. W. Jones, January 13, 1922, FBI File, RG61 (Hill, *ibid.*, p. 413)
- 55) Vincent, *Black Power and the Garvey Movement*, p. 110
- 56) *Negro World*, March 1, 1919 in Hill, *Papers*, vol.1, p. 383
- 57) ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』(NTT 出版, 1997 年) p. 84
- 58) Alan Gregor Cobley, "'Far From Home': The Origins and Significance of the Afro-Caribbean Community in South Africa to 1930," *Journal of Southern African Studies*, vol. 18, no. 2 (June 1992)
- 59) UNIA Meeting at Carnegie Hall, August 25, 1919, in Hill, *Papers*, vol. 1, p. 501
- 60) *Negro World*, November 6, 1920, Government's Exhibit 39, Marcus Garvey vs. United States of America, pp.2515-6
- 61) ダヴ・ローネン『自決とは何か－ナショナリズムからエスニック紛争へ』(刀水書房, 1984), p.50
- 62) 唐渡晃弘『国民主権と民族自決－第一次大戦中の言説の変化とフランス』(木鐸社, 2003),

pp.128-29

- 63) *Negro World*, April 5, 1919 in Hill, *Papers*, vol.1, p. 397
- 64) *Negro World*, November 1, 1919, in Hill, *Papers*, vol. 2, pp. 117-18; 米国議会に対し、旧ドイツ領の委任統治を定めた国際連盟の決定に反対するよう訴えたときも、ガーヴィーは、「あなた方は、アフリカ原住民に対して、パトリック・ヘンリーの精神を否定するのか」と問いかけている。  
Petition by Marcus Garvey, February 21, 1919, in Hill, *Papers*, vol. 1, pp. 366-69
- 65) *Negro World*, July 17, 1920, in Hill, *Papers*, vol. 2, p. 412
- 66) *Ibid.*, p. 413
- 67) *Ibid.* p. 412
- 68) ただし、行き過ぎた資本主義は悪意のある対立をもたらすため、資本主義を支配する個人の所有は100万ドルまで、会社は500ドルまでという制限が必要であるとも述べている。Amy Jacques-Garvey, ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, vol. 2, p.72
- 69) Amy Jacques-Garvey, ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, vol. 2, p. 22; なお、出典の第1巻はガーヴィーが郵便詐欺罪で起訴された1923年に、第2巻は1925年に、自らの弁明を目的に出版された。本書を分析する際には、白人読者を想定して書かれたことを想起する必要があるが、進歩や成功に対する基本的な考えは初期から貫かれているといえよう。(Introduction by Robert A. Hill, *Papers*, vol. 1., pp. v-lxxix)
- 70) *Negro World*, September 17, 1921, in Hill, *Papers*, vol. 4, p. 39.
- 71) Editorial Letter by Marcus Garvey, May 3, 1920, Hill, *Papers*, vol. 2, p. 330
- 72) Government's Exhibit 60, Marcus Garvey vs. United States of America, p.2566
- 73) UNIA Meeting in Pittsburgh, September 1919, Hill, *Papers*, vol. 2, p. 28
- 74) Editorial Letter by Marcus Garvey, January 31, 1919, Hill, *Papers*, vol. 1, pp. 352-353

**Abstract****Tracing Marcus Garvey's Early Career: From Jamaica to the "Black Atlantic"****Keiko ARAKI**

Marcus Garvey established the first black mass movement in the United States in the early 20<sup>th</sup> century. He believed that people of African descent in the world suffered discriminatory treatment because they did not have a nation-state which had a respected status in world politics. According to Garvey, both political independence and economic strength were necessary for all states and people to acquire this status and to be recognized in international society.

Garvey shaped his Pan-African ideas by moving around the "Black Atlantic," the concept of Paul Gilroy, by meeting black elites and commoners from different parts of the world. However, as this article explains, Garvey gained a universal vocabulary and rhetorical power especially in the United States during and after WWI. His black independence movement became more persuasive using concepts such as self-help, democracy, and liberty, and so expanded around the Atlantic world.